

ふるさと連尺未来プロジェクト

6月～11月(35時間)

1. ねらい

- ① 子供たちが、自分たちの住む町には様々な分野で活躍する人が多く存在することを知り、それらと深くかかわっている人々の思いに接することで、自分たちも連尺学区に住む一人であることに誇りを持ち、未来に向かって、前向きに生きていこう気持ちを育てることができる。
- ② 新しい文化と融合した新しい町作りに取り組もうとする意識を育むことができる。

2. 手立て

- ・学区探検や地域の人々とのかかわりを通して、文化遺産の保護や継承を身近な問題としてとらえることで、関心・意欲を高める。
- ・見学や聞き取りから生まれた課題を追究する中で、話し合い、かかわり合う時間を設定し、自分の考えを深めたり見直したりできるようにする。
- ・振り返りカードを活用し、個々の実感したことや考えをまとめ、話し合いに活用したり、一人一人の学びを支援する。

3. 実践の概要

○ 連尺の町のよさって何だろう

子供たちは、これまでの総合的な学習(町学習)において、3年生で「昔の連尺小学校」、4年生で「二七市」、5年生で「戦時中から戦後復興までの歴史」をテーマとした学習を行ってきた。また、6年生の一学期には、学区の歴史的な建造物について、調べ学習を行い、実際に石碑や寺院などをまわることを通して、文化遺産の数の多さに驚きながら、今まで知らなかった連尺の歴史に触れて学区への愛着を高めていった。しかしながら、子供たちの中には、戦後復興の勢いもなくなり、現在、この学区が抱える問題点「市街地の空洞化」を話に聞き、漠然とした不安を訴える者もいた。学区が寂しくなった、人が少なくなったというマイナスのイメージを強く持ち、解決の糸口が見あたらない問題に、この学区の将来を危惧する思いも感じられた。

しかしながら、実際、転換期を迎えた連尺の町は、過去の商業都市としてのよさにこだわらず、古きよき時代の文化を取り入れた新しい発展都市を目指して、今まさに市民自治活動が活発に行われる精神的なエネルギーにあふれる町と変わりつつある。現在、市民活動団体やボランティア団体が少しずつ増え、昔からの伝統的な技や文化を継承しつつ、交流プラザ「りぶら」のような新しい文化の象徴を生み出している。こうしたエネルギーこそが、自分たちのふるさとを支える大きな力となっていくことだろう。そして、こうした「昔」と「今」が混在する町の営みを知ってこそ、地域への愛着や親しみが生まれ、そこに自分がどうかかわり、何ができるのかを考え、実行していくことこそが未来に向けて、地域を守り創り上げていく力の源となってくれるだろうと考えた。

そこで、子供たちの意識を現在の学区の「人」へ向けさせることから学習をスタートさせることにした。まず、今まで学習してきたことを基に、学区のよさについて発表することにした。(資料①)

すると、やはり4年生で学習した「二七市の温かさ」や5年生で学習した「伊賀川の自然」、そして、6年生の学区探検で見た「歴史的建造物」など、漠然としたものだった。そこで、「なぜそれがよさだと思うのか」と投げかけたところ、「伊賀川を守る会の方が熱心に清掃活動を行っているから」「お年寄りが安心して買い物ができるか

【授業記録】(資料①)

- C1 歴史がいっぱい感じられるのは、徳川家康の生誕の地だし歴史深い町だから、いろいろ菜ところに文化遺産があるのだと思います。
- C2 他に自然もいっぱいあります。ぼくたちは、伊賀川の掃除を一年間続けてきたんだけど、ごみを捨てる人が多くて困っていました。
- C3 でも、大美さんたち伊賀川を守る会の方々が一生懸命に掃除をしてくれています。-中略-

ら「徳川家康の生誕の地だから」など、現象として認識はしているものの、その伝統が今もなお脈々と息づいている大きな理由が、その陰で支えている人の努力のたまものであることにまで思いの及んでいないことがうかがえた。そこで、歴史探訪の旅を通して、そこにある人の願いや努力にふれさせることで、子供たちの理解を深めようと考えた。

○ 連尺の歴史を探訪しよう

(二十七曲ウォークラリーを通して)

学区にある多くの歴史を探訪するにあたり、現地を自分の足で歩き、目で見て、話を聞く機会をウォークラリーという形で行うことにした。市と協賛して行うウォークラリーに参加し、子供たちなりに気づきをマップに落とし、意見交流を図った。(資料②)

子供たちが、歴史的な建物や石碑を知るだけでなく、それらを支えている方々の苦労や努力に少しでもふれられるものにしたい。そのためには、ウォークラリーに携わる人が地域で活躍されていることが条件になる。そして、ラリーの傍ら、インタビューや取材を行うことにより連尺に力を尽くす人たちの思いや願いにふれられればと考えた。そこで、スポットを当てたのが、実際に市販されているものではなく、自分の足を使って調査され、子供たち用に改良してくださった地図を作っているK氏であった。膨大な時間と労力をかけ、何度も何度も改訂しながら、少しでも、連尺の歴史を正確に語り伝えたいと願っているK氏の情熱にふれることは、ふるさとに対する価値観を深める有効な手立てだと考えた。

学区の歴史的文化遺産の豊富なことを実感し追究意欲が高まっていた子供たちに、K氏の話聞く機会を持った。案の定、子供たちは、地図に興味を示し、「何も苦労はないよ。やっているとおくさんの方とのつながりができてうれしい。」と言ったK氏の言葉に、無償の思いがあることを実感していった。(資料③)

○ 学区のよさを学区から学ぼう

知らなかった歴史にふれ、追究意欲が高まったところで、感想交流を行った。話し合いの中の観点は4つ。「連尺の自然を守りたい」「歴史を守りたい」「支える人を探りたい」「新しい文化を伝えたい」の4つのグループに分かれていった。Y男のグループは、K氏のことばに感動し、連尺の学区の人に視点を当てて、調べていきたいと考えた。そして、K氏のような、学区のために熱い思いを持って活動をしている人から学んだ未来の連尺を提案したいという思いを持った。

○ 学区の歴史・人・環境・街作りについて知ろう

次の時間調べたい分野に分かれ、取材・インタビュー・活動に出かけた。調査が進むにつれて、子供たちの目は、これからの連尺のあり方や自分にできることに向けられていった。取材やインタビューに向かう相手は、地域のあらゆる分野で活躍している方々にあらかじめ依頼し、その苦労と願い、そして、実際に自分を動かしている原動力は何かを語っていただくことにした。

歴史グループは45箇所の文化遺産や歴史的建造物を巡り、取材



町の人への取材



意見に基づいてまとめる②



自分たちの気づきを出し合う

【授業の感想から】資料③

◆たまじゅう社長加藤さんの話を聞いて、びっくりした。東京の博物館にまで問い合わせて、むかしの資料を探したり、ぼくたちのために世界でたった一つしかない地図を作って下さったり。どうしてそんなにまでして下さるんだろう。

【4つのグループ】

- ①歴史グループ
- ②環境グループ
- ③街作りグループ
- ④人グループ

【聞き取りの感想より】資料④

◆ 今まで、わたしはそんなに歴史に興味がなかったけれど、取材で実際にまわってみて、こんなにすばらしい歴史的建造物があるということが分かったし、その歴史的建造物が残っているのも、努力を重ねている人がいたからこそということも分かりました。(M子)

を重ねるごとに歴史の裏にある人々の願いを聞き取っていった。(資料④)また、人グループは、今の街を支えている人の願いを知ることができた。(資⑤)環境グループは、実際に自分の手で学区をきれいにしようと活動することを通して、伊賀川を美しくする会の方々の願いや思いを実感していった。(資料⑥) また、街作りグループは、多くのボランティア団体によって、今の学区をよくするための活動が繰り返されていることを知り、活性化に向けて前向きなエネルギーを感じることができた。

【人グループの感想より】資料⑤

◆ 昨年5年生から調べてきた連尺の町。戦後の混乱の中、町の人たちが何とか力を合わせて復興させてきました。今回、わたしたちは、今の町を支え続けている人の願いを知りました。どの人も快くインタビューに答えていただき、「ああ、これも連尺の魅力かな」と思いました。—中略—「昔のようににぎわってほしい」という思いも大きなものでした。また、宝金堂さんのおっしゃった「この町に大きなスーパーやショッピングセンターができて、ただ、にぎわえばいいというわけではない。」という言葉 わたしはその言葉に共感し、この町にしかない魅力やよさでにぎわってほしいなと思いました。(S子)

【環境グループの感想より】資料⑥

◆ わたしは、実際にごみを拾うことでいろいろなことを感じました。その中でも一番心に残ったのは、学区の優しさです。去年から続けてきて、通りかかった人たちが、「ありがとう」や「頑張ってるね」と言ってくれることがとてもうれしかったです。学区の人の言葉が、わたしたちの支えにもなり、もっとたくさんのごみを拾って、学区をもっときれいにしようという気持ちはどんどん強くなってきました。(M子)

○未来の連尺についての願いを伝える活動しよう(あいあい学習発表会や広報活動を通して)

あいあい学習発表会に向け、調べた事をどのように発信していったら良いかの話し合いでは、つぎのことが挙げられた。(資料⑦)

一人一原稿を基本にまとめていった。聞き手の心に訴え、分かりやすい発表を心がけた。

あいあい学習発表会当日、多くの観客の前で、子供たちは、あいあい学習で育まれたふるさと連尺への愛着と、それらを支えている人々の努力に敬意をはらい、ふるさとのよさを守り続けたいと強く訴えた。そこには、学区に住む一員としての自覚を強く感じる事ができた。この単元はオープンエンドの形をとるが、このふるさと町学習の有効性と子供たちの心の成長を強く感じることができた。

【話し合いの結果】資料⑦

- 取材した人や伝統・文化を守っている人の願いを受けついで上での発表でなければならない。
- 連尺のよさを生かした街作りの提案にしたい。
- 残したいものと新しい文化をうまく混ぜていきたい

◆成果と今後の課題

何気なく見過ごしがちな学区に目を向け、「物・人・こと」に働きかけることで、歴史的な意義や、人の温かさを十分に感じることができた。また、実際に、「人」に焦点をあて、その人の生き方に強くかかわっていくことは、子供たちの生き方に大きく影響を与えることとなる。陰に隠れた努力やがんばりを知ることによって、今後、未来を担っていく子供たちが、自分の足もとをしっかりと見据えた前向きな態度を培ってくれるものと願ってやまない

一方、発表会が発信の場とするなら、観客が保護者だけでなく、地域の人や一般の方であってほしいのだが、施設面や時間的な制約からそれがままならなかった点が悔やまれる。